大阪京都の旅 2025

2025 年 2 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

2 月の末、友人たちと大阪に 2 泊してグルメを堪能し、観光名所ではないが大阪と京都を感じさせてくれる珍しい場所を訪れてきた。

■フグとカニを堪能

私が勤めていた会社の保養所が大阪にあり、私は年に数回そこを利用している。そして今回も旅友たちと連泊して、大阪と京都のそれぞれで最もそれらしくて珍しい場所を巡る旅を企画した。

【フグ尽くし会席のテッチリ鍋】

初日の夜は、この時季ならではの「フグ尽くし会席」を食べる。

フグのオンパレードのコース料理で、フグの刺身のテッサ、皮のテッピ、白子、唐揚げ、そしてテッチリ鍋とフグ雑炊で〆る。

食レポを書くまでもなく、実に美味い。

翌日は「カニ尽くし会席」を食べる。大阪は北陸や山陰が近いので、冬はカニ料理の宣伝が非常に多くなる。

1 人 1 杯の茹でガニに始まり、刺身、カニ味噌甲羅焼き、天ぷら、最後はカニ鍋、そしてカニ雑炊で〆る。

毎年、最後のカニ雑炊の完食を目指すが、なかなか達成できない。今回もまた完食を逃した。

【カニ尽くし会席の茹でガニ 4 杯】

■いかにも大阪

昼間は旅友たちと、いかにも大阪という「通天閣」を訪れる。そして近くの「大阪もんじゃ焼き」の看板の店が目に留まり、暖簾をくぐる。

江戸時代末期の江戸で、鉄板に文字を書いた「文字焼き」から「もんじゃ焼き」が生まれ、大阪や広島に広まり、お好み焼き文化が確立されたという。だから大阪もんじゃ焼きはその進化の過程という仮説が成り立つ。

その仮説を検証すべく、いかにも大阪らしい牛筋もんじゃ焼きを注文する。

ただ出てきた大阪もんじゃ焼きは牛筋が入っているだけで作り方も他の具材も東京もんじゃ焼きと変わらない。

思惑から外れるものの、その味には満足して、ビールを飲みながら舌鼓を打つ。

【通天閣】

【大阪もんじゃ焼きの店】

近くの「あいりん地区」はドヤ街とか日雇い労働者の街とか言われ、かなり異様な街だ。その異様さを感じたのは看板で、「飲み屋で覚せい剤を売るな！」とか、「男になりたいならホストと闇バイトはするな！」と書かれている。ここは本当に日本の大都市の大阪なのか。

【あいりん地区の張り紙】

■飛田新地

さらに驚くべきことは、あいりん地区の隣の「飛田新地」だ。

大阪在住で事情通の旅友が「ここは遊郭、それも日本最大の遊郭だよ」と言っている。私は「遊郭は今年の NHK の大河ドラマ『べらぼう』でやっているけど、江戸時代のことじゃないの？」と聞き返すと、彼は「江戸幕府公認の吉原は近年まで続いたけれど、戦後の売春防止法で無くなった。でも飛田新地は現存しており、表向きは遊郭を名乗れないので飛田料理組合が管理する料亭の集まりということになっているよ」と教えてくれる。

私たちは怖いもの見たさで街を歩き始める。路地が何本もあって、間口数メートルの店がたくさん並んでいる。事情通によると 150 店舗以上というから凄い。

写真を撮ろうとしたら白い割烹着を着たオバサンが出て来て厳しく制止される。特別な場所なので写真撮影が一切禁止されていると言い、よく見ると至る所に写真 NG の表示がある。

各店の玄関の戸が開いていて、若い娘が表を向いて座布団に 1 人で座っている。その脇にはマネージャー役らしき割烹着を着たオバサンがいる。料理店ということなので割烹着を着ているらしいが、先ほど写真の制止などもこのオバサンの仕事らしい。

若い娘は綺麗な服で着飾っている。セーラー服、着物、中には下着姿の娘もいる。

客が玄関先でその娘を気に入れば、一緒に奥に入るというシステムになっているようだ。玄関に男物の靴が置かれていて、娘が座布団に座っていない場合は接客中ということになる。

私も含め男どもは皆、興味津々の目で見ている。女性陣からは「可哀そう・・・」という声が聞こえてくる。

写真 NG ということで、飛田新地を出た北門のところから写真を撮る。これならば文句は言われないだろう。

【左に北門の表示　外から見た風景】

■京都迎賓館

最近の京都はインバウンドの増加でとにかく混んでいる。その混雑を避けて最も京都らしい場所だと私が思っているのは、京都御所の一角にある「京都迎賓館」だ。

迎賓館と言えば東京にある迎賓館赤坂離宮を思い浮かべるが、東京の迎賓館はベルサイユ宮殿のような洋館がメインになっており、和風別館もあるが、そちらはあくまでも脇役だ。

京都迎賓館は 2005 年に開館したので東京の迎賓館よりも新しい。京都という場所柄からして“和のもてなし”のためにできた。

厳しいセキュリティチェックを受けて、私たちは 80 分のガイド付き見学ツアーに参加する。飲み物の持ち込み、建物や調度品に触れることが禁止されていることなどは東京の迎賓館と同じだ。

しかし私にとってのありがたいことは写真撮影が許されていることだ。

東京の迎賓館の和風別館は建物の前に単に池があるだけだったが、こちらは池を囲むように複数の建物が建っている。

池には高級な錦鯉が泳いでおり、ガイドは「2004 年の中越地震で被災した錦鯉業者から買い取ったものです」と説明してくれる。

池の中央付近に池を横断するように橋が架かっており、橋の中央の部分は少し広がっており、鯉への餌やりを楽しむことができる。

何と雅（みやび）な世界なのだろうか。

【上から見た京都迎賓館（Google マップ）】

【四方を建物に囲まれた池　池の中央付近の橋】

さらに雅な世界が広がる。船頭が漕ぐ舟に乗って舟遊びも楽しむこともできる。

ガイドは「2012 年ブータン国王夫妻が新婚旅行で訪日した時に舟遊びをしました」と言って、その時の写真を見せてくれた。

【舟遊びの舟と池と橋】

東京の迎賓館の和風別館には 47 畳の広間が 1 室だけあったが、こちらはそれと同レベルの広間がたくさんある。もちろん豪華で日本の品格を感じ、日本建築のレベルの高さを実感できる。

桐の間は最大 24 名までの会食が可能な 56 畳の和の晩餐室で、黒塗りの座卓は長さ 12m もある。座卓の下は掘りごたつのようになっており、海外からの賓客も楽に過ごせる。

【桐の間】

広間だけでなく広間と池の間にある廊下も実に見事で、これだけでも充分に画になる。とても落ち着きがあって、何故か心が癒される。

【廊下】

夕映の間は壁面装飾を施した可動式の壁面で三分割することができ、国際会議も開催できる。国際会議は会議の様子を見ながら同時通訳をする必要があるので、会場全体を見渡せる場所に覗き窓がある。覗き窓は鴨居の上の壁の部分にあるので、廊下の天井の上に部屋があることになる。普段はその覗き窓が閉まっているので、一見分からない。

【夕映の間　赤の点線の部分に覗き窓があり、写真では閉まっている】

藤の間は椅子席で最大 120 名まで利用可能な晩餐会が開ける。絨毯張りで、無地に見える絨毯に模様が描かれている。

【藤の間】

まさしく日本建築技術の粋（すい）を集めている。それ以外に、“遊び心”もあるから日本建築の粋（いき）も感じる。それは欄間などに昆虫をあしらった切り絵のような飾りが彫られており、実に見事としか言いようがない。

それにしても同じ漢字の“粋”に 2 つの意味があるとは、これも奥が深い。

【欄間などに刻まれた彫刻】

その他にもいくつも部屋がある。滝の間は桐の間の奥につながり、22 畳の和室で昇降式の座卓が設置されている。水明の間は首脳会談などに用いられ、大池に張り出した開放的な空間になっている。聚楽の間は晩餐会などが行われる際に、ゲストや随員の待合などに使用される。

これだけ立派な施設なので、旅友の 1 人がガイドに利用頻度を聞くと、ガイドは「賓客の利用は年に 10 回程度ですね」と教えてくれる。この数字を聞いて私も旅友たちも見学者たちも皆驚いている。

実にもったいないことだ。これだけの施設を年 10 回しか使わないということは、1 年で 355 日は使っていない。ほとんど使っていないのに等しい。

日本国民の税金で建てられ運営されているのだから、日本国民は京都を訪れるならば是非とも立ち寄ってもらいたい。そして日本建築の粋と粋を知ってほしい。

■旅の記録

実施は 2025 年 2 月 25 日（火）～2 月 27 日（木）の 2 泊 3 日で、その行程を示す。

・1 日目　兵庫県姫路市の家島諸島の旅の帰りに大阪の保養所に立ち寄り、15 時チェックイン
　　8 人でフグ尽くし会席を食べる

・2 日目　10 時に宿を出て、通天閣、その付近で昼食、飛田新地、15 時に宿に戻る
　　4 人でカニ尽くし会席を食べる

・3 日目　10 時に宿を出て、京都へ 11 時 45 分から「京都迎賓館」見学（80 分）、
　　丸太街の食堂「京うまれ烏丸」で昼食、15:33 発ひかりで新横浜駅へ、解散

費用は約 42000 円、詳細を以下に記す。尚、横浜～大阪往復費用は家島諸島の旅に含まれており、ここでは計上していない。

交通費　2000 円

・JR、地下鉄など　約 2000 円（新横浜、大阪、京都の電車代、タクシー代の人数割）

宿泊費　34000 円

・保養所　　34000 円（フグ尽くし 19000 円、カニ尽くし 15000 円 酒代込）

その他　6000 円

・京都迎賓館　　2000 円（見学料）

・昼食　　約 4000 円（2 食分、酒代含む）